



相あい

去ざれ



先

月の大正北ノ川から、相去川に沿って山間部へと入っていく。少し行くと鳥手地区。左右に迫る山の合間を縫ってさらに進む。しばらく行くと急に視界が開けて、陽当たりの良い、ゆったりとした空間が現れる。相去地区である。

相去(相佐礼)村は、明治時代まで、北ノ川(北野川・喜多川)六ヶ村の一つであったこと、北ノ川村には庄屋を置き、相去(相佐礼)村など、その他の村には名本という役職を派遣していたことは以前書いた。江戸中期の記録には「相去連」「相去礼」などの表記があるようだが、戦国末期の記録には、相去村という村名は見当たらないという。喜多川(北ノ川)村の項に「北川ヒルハシ村」「東また村」とあるのが、おそらくその後の相去村であろうと推察されている。

さて、この地区は、東の山を越えれば窪川町の川口(南川口地区)、西の山を越えていくと芳川へと抜ける。芳川への道は今も使われているらしいが、川口への道は、ほぼ使われていない。昭和30年代までこの道は、この地区の人々にとって重要な生活道であった。命の道といってもよい。北の川に診療所ができるまで、地区民にとって最も近くにある医療施設は川口にある診療所。近くと言っても歩いて2時間あまりかかる。子どもが熱を出せば、親は子どもを背負って山を越え、診察を終えればまた背負って帰ってきたのだという。

産土神は河内神社であるが、地区



河内神社。向かって左に集会所、右に地区の特産味噌加工場。

にはそのほかにも五つのお宮を祀っている。また、大蔵庵という茶堂を兼ねたお寺(地藏堂)もあった。明治に入って学制が布かれ、北ノ川に小学校が開校するまでの数年間、この大蔵庵が巡回授業場となった。現在は、集会所のすぐ隣に移設されていて、石仏一体と木造仏三体が安置されている。この石仏もまた、市ノ又の石仏同様、細かく丁寧な仕事がなされていて、同じ仏師の作ではないかと考察できる。

地区の国有林は、江戸期の御留山である。良質の木材を抱え、土佐藩財政を支えた。したがって、相去地区は長く林業が盛んで、昭和に入ってから、炭焼きが主産業であった。国有林で切り出された木材は、馬車で北ノ川に運ばれていった。空になった帰りの馬車には、北ノ川小学校から帰る子どもたちが乗り込むこともしばしばであったという。乗せてくれるか降ろされるかは、その日の御者(馭者)のご機嫌次第だったそうだ。少しやんちゃな当時の相去っ子の子が目に浮かんで微笑ましい。

町のうごき

(2月28日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,812	-13	男 2	16	9	8
女	8,581	-27	女 6	16	6	23
計	16,393	-40	計 8	32	15	31
世帯数	8,324	-11	(2月中の届出)			

窪川地域 11,622人 大正地域 2,273人 十和地域 2,498人

四万十川の水質状況

	適正值(mg/l)	3月15日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.309
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.20
化学的酸素要求量	≤ 10.0	5.878

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部